2024年10月27日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

かの日を望み見ながら

［コリントの信徒への手紙一8～13節］

愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

[1] 私たちが知ることが出来るのは、ごく一部。

　今日はこの礼拝の後、市内にある教会墓地に行き、一昨年神様の許に召された坪田房子さんと、昨年神様の許に召された加藤明さんの納骨の式も執り行います。屋外で行いますので、お天気もまず守られそうですので良かったです。今朝のこの「永眠者記念礼拝」は、週報にそのお名前を記させて頂きましたけれども、先に主の御許に召された方々とそのご家族を覚えて持たせて頂いています。

人がこの地上に生を与えられ、様々な経験を重ねながら生活をし、そのお一人お一人がやがてこの地上の生を終えてゆく。それはとても厳粛なことだなぁと改めて思います。私たちにとって「いのちのはじまり」ということも、頭で考えても分からない神秘であるし、「いのちの終わり」ということも、私たちの手の内にはない、やはり神秘だと思います。そしてそれだけに尊いことだと思います。

私たちは、だれだれさんのことを思い巡らす時、まずその人の顔を思い起こすと思います。ですから、その方が召された後も、その方のお顔の写真を飾ったりします。でも、当然ですが、その方のいのちというのは、写真では収まり切らないものですよね。外見なんて、本当にその人の一部分です。写真を飾るというのも、むしろ、その人の‟中に”入って行くというか、深く知っていくための扉のようなものなのかなと、思います。私自身も、両親の顔写真、また妹の写真が家に置いてあります。そして、思うのです。お互い生きている時というのは、外面的な生活に追われて、その「家族」なら「家族」のことなど意外と知らないことが多いままになっていたな、と思うのです。それは、良い・悪いということでもないと思います。私たちの人生は、心を通じ合わせるといってもそれが出来なかったり、限界があったりします。それでも「一緒に生活した」「一緒に何かをした」という事実は、かけがえのないことではないかと思います。その意味でご家族にとっては、ご家族ならではの「共有」の時間というものは消えないものだと思います。また今日は、この教会で共に「礼拝」をしてきた仲間を覚えての記念礼拝でもあります。私が以前教会員だった東京の大泉教会で、若く（40代でしたか）病気で天に召された教会員の葬儀を行った時に、そのお父様が初めて教会に足を運ばれ、その息子さんの教会中での屈託のない朗らかな姿などを教会員の方が葬儀の中でお話をされたのですが、後でお父様は「自分はそういう息子の一面は知らなかった。教会で笑顔で過ごしていたと聞いて本当に良かった」とおっしゃっていたことを思い起こしましたけれども、誰かについて、私たちが知ることが出来る部分というのは、本当に一部分なのだと思います。

[2]　神様に捕えられたお二人

今日、納骨式を行う坪田房子さんと加藤明さんのこと、また、納骨式は終わっていますが、今年の初めと、その2年前に召された前牧師夫妻の加藤享牧師と喜美子さんのことについては、教会員の飯塚さんがとても良い冊子を作って下さり、それを読むと、写真だけではない、その方たちの内面が立体的に伝わってきますので、是非じっくりとお読み頂ければと思います。

ただ、少しだけ触れさせて頂くと、坪田さん、また加藤明さん、お二人はある意味対照的な所もあるのですが（信仰を持たれた時の年齢とか）、しかし、人生のある瞬間に神様に捕えられ、そこから新しい人生がスタートしたという経験をされていますね。

坪田さんは信仰告白文によると、就職もして人間関係も恵まれていたけれども「宣教師の先生を通して語られる聖書の言葉に耳を傾けるうち、心の奥底に潜んでいた空虚感が満たされていくのを感じました。今まで感じたことのない解放感と確信が与えられました。（その後）1961年、父に勘当を言い渡されましたが、すべてを主に委ね、共立女子聖書学院に入学しました」と書いておられます。そして、卒業されてからは宣教師のヘルパーをされたり、卒業された聖書学院の舎監などを勤められました。ご結婚はされず、最後の3年間は、飯塚さんご夫妻が「一緒に暮らそう」と招かれ、そして川越教会の礼拝においでになるようになりました。私は飯塚さんも凄いと思いますが、その招きにお応えになった坪田さんも凄いなあと思いました。そのしなやかさと言ったらいいでしょうか。

加藤明さんは、定年後に神様の導きを強く与えられました。信仰告白文にこうあります。「世間でいう定年の時期を過ぎて、身近な人達が次々と他界し始め、自らの老後も真剣に考えざるを得なくなってみると、自分が犯してきた人間としての罪の深さをひしひしと感じ、たびたび悪夢に襲われるようになりました。妻の人生を犠牲にし、従って子供たちの心にも傷を負わせ、周囲への迷惑を省みず。欲望の赴くままにしたい放題の生活をしてきた罪に対し、悔やみこそすれ、残る人生でどう償うべきか、どう人生を乗り切れるのかの解決策が見出せず、人生で初めて信仰の必要性を痛感するに至りました」。明さんは、弟である加藤享先生が牧師をしている川越教会で享先生からバプテスマを受けるに至りました。83才の時です。それからです、礼拝でリードオルガンを弾くために目白ヶ丘教会でレッスンを受け、その奏楽奉仕は、月一度ずっと続けて下さっていました。そのオルガンによる奏楽で、皆で賛美を歌い、その中には坪田さんのお顔もありました。お二人とも、礼拝に臨まれる姿勢にはとても教えられました。明さんは聴力が弱くなられ、御言葉の宣教が聴き辛いので、原稿が欲しいと仰られ、私自身準備に心が引き締まりましたし、坪田さんは、本当に真直ぐに前を向いて宣教を聞いて下さいました。それは前に立つと判るのです。私は坪田さんは本当に神様の前に出ておられるということをいつも感じましたし、励まされました。そして時に、新米牧師の私を「焦らずにやりなさいよ」と助言もして下さいました。有難いことです。祈って下さっていたのだなと思いました。

[3] 完全に知って下さる方の許で

その意味で永眠者の方々は、「今」の私たちに語りかけてくれます。人は亡くなり、骨になると「過去」の存在になるのでしょうか？いいえ、むしろ逆です。私たちと、その方とが「出会い直す」ことがここから始まると言って良いのではないかと思います。

私は最近、『出会いなおし』という短編集の小説を読んだのですが、作者は森絵都さんという方ですが、その解説文の、作家の中江有里さんの文章にも惹かれました。―「…人はそう簡単にわからない生き物だということだろう。たとえどんなに親しい相手だとしても、その一面しか見ていない、もしくは知らないのかもしれない。他の面を見るには、ある程度の時間がかかる。そのために人は、同じ相手に何度も出会いなおしする必要がある」。…「同じ相手に何度も出会いなおしする必要がある」と言いますが、それは相手が生きている時だけではなく、むしろその出会いが、意味を持って心の中に沁み込んで来るのは、地上での別れを経験してからなのかもしれません。生きている時は、照れ（？）なのか、余計なことにとらわれているのか、どこかバリアーがあるのです。

コリントの信徒への手紙一の13章、有名な「愛の章」の中に、このような言葉が記されています。13章12節です。「わたしたちは、今は鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせてみることになる。わたしは今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知るようになる」。これは、‟終末的な”大きな慰めです。どんなに近い存在同士でも、ああすれば、ああ言えば良かった、あの時自分はそれが出来なかった、或いは、誤解やすれ違い、傷つけたり、傷つけられたりということ、それ故の怒りや後悔の気持ち…そういうものを引き摺りながら地上の命を終えてしまう私たちではないでしょうか？‟過去”には戻れないし変えることが出来ないから苦しいのです。しかし、そんなモヤモヤを抱えてしまう私たちを‟完全に知って下さる”お方がいらっしゃるのです！十字架の主イエス・キリストです。「大丈夫、そのような荷物はわたしが背負っているのだから」と仰って下さる方です。深い所で赦しを求めて生きている私たちに対する完全な受容・赦しです。それはかの日、世の終わりの日まで隠されてはいます。しかし、私たちはそれを信じ、今、その恵みを頂くことが許されている。そして「そのときには、はっきり知られているように、はっきり知るようになる」との神様の約束が成就する時が訪れる。私たちはこれを信じて地上の生を生きて行けばよいのですね。安心して。…そもそも、なぜ私たちの命があるのか。それは創世記にあります。「人が独りでいるのは良くない」。神様が、私たちが愛し愛されて生きる生活を与えようとしているからだと思います。この地上ではそれに破れ続ける私たちでしょう。しかし、だからこそ神様は主イエスを送って下さいました。先の中江有里さんはこのようなことも書いていました。―「人生はいつも人に出会う途中で、人と出会いなおしながら、いつも、誰かを愛する準備をしている」と。

誰かと私の間に入っていて下さる神様がいて、そのお方は、大きな赦しの中で、私たちに人と出会う勇気を与えてくれます。そして私たちは、いつの日か、何のわだかまりもなく、先に召された方と新たに出会うことができるのです。その時には様々な痛みや人間的な思いも消えているでしょう。それ迄、主のみ言葉を信じ、共に生きて行きたいと思います。お祈り致します。

主なる神様、今日、既にあなたの御許に召された方々を覚え、またその方との出会いをあなたが与えて下さったものとして感謝して礼拝を捧げられたことを感謝します。悲しみを新たにされている者に、あなたの慰めを豊かにお与え下さい。そして、なお地上の生をなお生きて行く私たちに、あなたからの確かな望みに立って行くことが出来るようにあなたの霊を送り、励まして下さい。午後に教会墓地で行われる礼拝・納骨式の上にもあなたが恵みを豊かに注いで下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。